



在日ベトナム人宗教施設が持つ社会的意味に関する 一考察 : カトリック教会と仏教寺院における活動の 比較

野上, 恵美

(Citation)

鶴山論叢, 10:41*-56*

(Issue Date)

2010-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81002081>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002081>



在日ベトナム人宗教施設が持つ社会的意味に関する一考察

—カトリック教会と仏教寺院における活動の比較—

A study on the social meaning of religious institutions for Vietnamese
— living in Japan: a comparison between the activities in a Catholic church and a Buddhism temple —

野上 恵美

Nogami Emi

【キーワード】

在日ベトナム人、カトリック教会、仏教寺院、定住化

はじめに

本稿では、カトリック教会と仏教寺院に集まる在日ベトナム人の活動を比較し、そこから両者の間に存在する差異を導き出し、その差異が持つ社会的意味とは何かについて考察する。そして、調査を通して導き出された社会的差異が、在日ベトナム人の定住化プロセスを再検討する上で有効であることを示唆する。

今回は、兵庫県 X 市にあるカトリック A 教会と埼玉県 Y 市の B 寺を事例として取り上げる。本文中にあるカトリック教会に関する記述については2008年4月から継続的に行っている参与観察およびインタビュー調査、仏教寺院に関する記述については2008年7月から断続的に行った参与観察およびインタビュー調査に基づいている。なお、本稿で紹介する Y 市の B 寺に関する記述については、これまでまとまった資料や研究がないことから、これが最初の調査報告になる。

これまで、在日ベトナム人を扱った先行研究の中で、宗教に関する活動について取り上げた研究として、川上 [2001a, 2001b] と戸田 [2001] の研究がある。

川上は、1980年代末から1990年代中頃までの在日ベトナム人社会におけるカトリック教会と仏教寺院で見られる活動を「在日ベトナム人の宗教実践」としたうえで、彼らにとって宗教実践とは、「ある者にとっては自己と家族、自己と祖国のつながりの確認と一時の『安定』を求める場となっており、またある者にとっ

てはアイデンティティの『不安定性』¹⁾を喚起させられる場であると述べている」[川上 2001a: 247]。それらを含めた上で、「在日ベトナム系住民にとっては『宗教実践』の場は自己のエスニック・アイデンティティの不安定性、可変性に覚醒しつつ、自己のエスニック・アイデンティティを形成していく場と言える」と論じている [川上 2001a: 247]。

戸田は、宗教を軸とした組織が定住開始直後から1990年代後半の間にどのように変化していったかを詳細に記述している。そのうえで、定住を開始した当初は政治組織が日常生活におけるサービスと情報を提供していたが、やがて在日ベトナム人カトリック教徒にとっては、これらのサービスと情報は自らが属するカトリック共同体によって代替され得るものであったと述べている。加えて、カトリック信者はカトリック共同体によって「信仰を深めると共に信徒間および神父との交流を持つ」だけでなく、「教会活動を通じてベトナム文化保持の機会を得ている」と述べている [戸田 2001: 120]。その一方で、在日ベトナム人仏教徒の場合は、カトリック系組織のような組織整備が整っておらず、ニーズに応じてくれる代替物の存在が非常に限られていた。そして、組織の衰退にともない、在日ベトナム人仏教徒社会には巨大な空白部分が生じたと述べている [戸田 2001: 139]。

筆者も調査を通して、カトリック A 教会に集まる人々から「ここへ来るとベトナムに帰った気持ちになる」、「ベトナム語を聞いたり、話したりすると自分がベトナム人であるということを感じる」という語りを何度も聞いた。加えて、B 寺に集まる人々からも似たような語りを聞くことができた。これらの語りから、宗教施設を「自己のエスニック・アイデンティティを形成していく場」、あるいは「ベトナム文化保持の機会を得る場」と捉えることができるだろう。

しかしながら、その一方で、異なる宗教施設に集まる人々を一括りにして論じてよいのだろうかという疑問が残る。なぜなら、異なる宗教を信仰する人々を「在日ベトナム人の宗教活動」という枠組みで論じてしまっただけでは、異なる思想や習慣を内在する多様な在日ベトナム人の生活というものを見落としかねないからである。仮にカトリック教会に集まる人々と仏教寺に集まる人々を、あらかじめ二つのグループと区分するならば、両者に見られる差異は何らかの社会的意味が見出されると考えられる。

そこで本稿では、上記の点を検討する際に必要な予備作業として、まずは両者の差異について報告および検討を行う。次にどのような差異が見出されるのかを踏まえた上で、それらの差異が先行研究で指摘されてきた「エスニック・アイデンティティ」や「文化保持」を考える際に重要か否かについて検討を行う。最後

に在日ベトナム人のカトリック教徒と仏教徒の両者に見られる差異の提示は、定住化のプロセスの発見に繋がるのではないかという仮説を導き出して、本稿の結びとする。

1. 在日ベトナム人カトリック教徒と教会との関わり方

在日ベトナム人の約3割がカトリック教徒であると言われており²⁾、この割合から在日ベトナム人社会においてカトリック教徒は少数派に属することがわかる。

しかし、カトリック教会には、「世界的統一規格」[戸田 2001: 117]が存在するため、在日ベトナム人カトリック教徒は日本のカトリック教会の資源を活用して様々な活動を展開してきた。ここでは、在日ベトナム人のカトリック系活動の歴史的経過を述べたうえで、具体的な活動事例として兵庫県X市のAカトリック教会で近年行われている活動について紹介する。

1.1. カトリック系活動の歴史

はじめに、ベトナム人カトリック教徒が日本にやって来るに至った歴史的経緯について簡単に述べておく³⁾。1954年の第一次インドシナ戦争終結に伴い開催されたジュネーヴ会議では、17度線を境に北の共産主義政権の「ベトナム民主共和国」と南の親米派政権の「ベトナム共和国」とに分断された。この時100万人以上の人々が北から南に移動したと言われているが、そのうちの約80万人がカトリック教徒だった[ミン 1995: 226]。カトリック教徒が北から南へ移動した背景には、北ベトナム政府のカトリック教徒に対する冷遇があった。

さらに、1975年のサイゴン陥落により、翌年の1976年にはすべてのカトリック教会が政府の管轄に置かれ、土地を没収されることになった。当時、国民の7%にあたる約300万人がカトリック教徒であったが、彼らは政府による弾圧を恐れ、多くの者がボートで国外脱出を図った。

日本にやって来たベトナム人カトリック教徒は、それぞれの定住先のカトリック教会で「共同体」を構成していった。1986年に兵庫県姫路市で「*Dai Hoi Dai Dien cac Cong Doan Cong Giao Viet Nam tren Nuoc Nhat* (ベトナム人カトリック共同体全国大会)」を開催し、全国各地のベトナム人カトリック「共同体」をとりまとめる「*Cong Doan Cong Giao Viet Nam tai Nhat* (在日ベトナム人カトリック共同体)」を設立した[戸田 2001: 118]。この大会には、全国のベトナム人カトリッ

ク「共同体」から12のグループの参加があり、日本人支援者も含め600人が参加した。大会では、信仰生活を守り育てること、地元のカトリック教会に和合すること、およびベトナム人神父を育てること等が決議された。

ベトナム人のカトリック系組織は、日本のカトリック教会の資源を活用することができたため、年々規模が大きくなっていった。次に大きく成長した「共同体」のひとつで中心的役割を担う、Aカトリック教会に集まる在日ベトナム人の活動について述べていく。

1. 2. Aカトリック教会の歴史

1. 2. 1. 教会設立からベトナム人がやって来るまで

Aカトリック教会は、在日ベトナム人集住地域であるX市Z区に位置している。1927年フランス人神父により民家から発足し、1929年に聖堂が建設された。また、教会敷地内には聖堂の向かい側に2階建ての司祭館が建てられた。

1935年には、Aカトリック教会に所属するカトリック教徒の数は日本人、在日韓国・朝鮮人合わせて500人になった。この当時は、聖堂の中にチマチョゴリを着た人も見られた。1950年から1965年までは、韓国語の話せるスイス人神父が主任司祭を務めていた。また、震災前までは、月に一度韓国人神父によるミサが行われていた。

1952年には、教会敷地内にA幼稚園が設立され、60名の園児を受け入れ発足した。幼稚園には信者、非信者を問わず入園することができた。1970年代後半までに約2,300人もの卒園生を送り出したが、他地域への人口流出によって園児数が激減し、1987年に廃園になった。なお、この幼稚園舎は1995年の阪神・淡路大震災によって焼失した⁴⁾。

1. 2. 2. Aカトリック教会に集まる在日ベトナム人の活動

Aカトリック教会にはじめて在日ベトナム人が訪れたのは1982年頃のことであり、1984年には2家族10人ぐらいの在日ベトナム人がいたということである〔叶堂1996:34〕。1980年代初期の頃というと、ポートピープルとして到着したベトナム人が姫路定住促進センター⁵⁾を出て、近郊都市およびその周辺地域で定住生活を開始した頃である。

在日ベトナム人は、教会の毎週日曜日のミサや平日の早朝ミサに日本人らと共に参加した。また日曜日のミサの後にシスターと日本人の婦人らによって行われる「日曜学校」⁶⁾には、在日ベトナム人の子ども達も日本人の子ども達と共に参加した。Aカトリック教会に集まる在日ベトナム人は、日本人と一緒に活動を行

うと同時に、1984年頃に在日ベトナム人のみの組織である「Xカトリック共同体」を形成した。

1986年8月に姫路市で「ベトナム人カトリック共同体全国大会」が開催された。この時「Xカトリック共同体」は「在日ベトナム人カトリック共同体」の支部のひとつとなった。

「Xカトリック共同体」としての活動は、そのすべてがカトリックA教会の在日ベトナム人によって担われていた。1985年からは東京の神父を招きベトナム語によるミサをAカトリック教会で不定期に行うようになった。1991年にはベトナム人神父が各地の在日ベトナム人「カトリック共同体」を巡回するようになったため、Aカトリック教会でも月に一度はベトナム語のミサが行われるようになり、在日ベトナム人が聖書の朗読や司会を行った。これらの「Xカトリック共同体」としての活動は、Aカトリック教会における在日ベトナム人の独自の会計により支えられていた。神父に渡す謝礼や交通費なども在日ベトナム人独自の会計から支出されていた。また、「在日ベトナム人カトリック共同体」が発行している月刊誌「*Phung Vu Loi Chur*」を購入し、Aカトリック教会に集まる在日ベトナム人に配布していた。さらには、母語教室の開催、子どもを対象としたキャンプの実施などを行った。これらの活動は、カトリック教徒でない人々も参加することができた。

Aカトリック教会へ集まる在日ベトナム人の増加に伴い、彼らの教会への関わり方が積極的になっていた。その事例として「キリスト像」の設置を取り上げる。

1.2.3. キリスト像の設置

ベトナム本国では、カトリック教会の入り口に大きなマリア像やキリスト像が建てられており、教徒は像の前で祈ることを習慣としている。1990年、Aカトリック教会の在日ベトナム人も、マリア像の建立を教会に申し入れた。日本人の中には、これについてカトリック教が戒める偶像崇拝に当たるのではないか、というような反発の声があがった⁷⁾。そこで記念碑建立委員会が組織され、日本人、在日韓国・朝鮮人、在日ベトナム人の代表らが議論した結果、ベトナム人定住のモニュメントとすることで落ち着き、1992年にキリスト像の除幕式が行われた。この像は、在日ベトナム人が募金を集め、ベトナム本国から取り寄せたものである。

以上の事例を通して、在日ベトナム人カトリック教徒が教会とどのような関わり方をしているか、Aカトリック教会を中心に見てきた。彼らは日本のカトリック教会の構成員として属しながらも、在日ベトナム人は独自の活動を積極的に展開していることがわかった。しかしながら、決して独自の活動が日本のカトリッ

ク教会の範疇を逸脱したりせず、その範囲内において展開されている。次は、カトリック教会において日常的に見られる活動であるミサに注目していく。

1. 3. 日曜日のミサ

毎週日曜日に9時半から行われるミサには、日本人、在日韓国・朝鮮人、在日ベトナム人を合わせると約200名が集まる。そのうちの半数以上が在日ベトナム人である。日本人と在日韓国・朝鮮人の参加者には高齢者で女性が目立つが、在日ベトナム人の参加者には若年層が目立ち、男女比はほぼ等しい。聖堂に入ると、在日ベトナム人は男女に別れて座る傾向がある。聖堂の奥に位置する十字架から向かって左半分に男性が、右半分に女性と子どもが座っている。そして中央には、日本人、在日韓国・朝鮮人が座るという構図ができていく。聖堂に入らない在日ベトナム人もおり、彼らは聖堂を出たスペースでミサに参加することになる。聖堂に入らない人があることを考慮して、このスペースには椅子が設置されている。聖堂の外でミサに参加する者は、聖堂の中にいる者と比べて雑談をしている者が多い。そのような人々の中には、ミサ中にも関わらず隣に座っている者と話し込んでいる者もいる。

乳児を伴いミサに参加している母親がいて、その横に座っている女性が母親から乳児を取り上げる。その行動がミサの間中続くため、乳児はミサに参加している女性達に次々と抱っこされることになる。乳児が抱かれていた様子を見ている周囲の女性が、誰の子か、何番目の子か、いつ生まれたのか、名前など乳児に関する情報を小声でやりとりしている。やがて、さっきまで小声で乳児について話をしていた者のところにも乳児がやって来る。ミサの最中であるにも関わらず、乳児を抱いている者は皆、乳児をあやすことに夢中になっている。ミサが終わると、最後に乳児を抱いている女性が、母親の元へやって来る。そこから、母親と女性の間で立ち話がしばらく続く。このように、1時間程度のミサの時間を使って、70名ほどの在日ベトナム人の女性達に乳児の存在が周知されることになる。

ミサが終わると、在日ベトナム人は男性グループと女性グループに分かれて雑談を始める。子ども達はシスターが主催する日曜学校に参加するため、子ども達が勉強している間、母親達は教会の庭先で雑談をしながら子ども達が戻ってくるのを待っている。そこでの話題は、誰と誰が結婚するとか、誰が病気になったというなど多岐にわたる。話題にのぼる人々は近隣に居住しているベトナム人だけでなく、関東やその他の地域に居住するベトナム人におよぶこともある。

彼らは自分達が持っている情報を他人と共有しあうだけではなく、時には自分が職を探していることや、日本語の勉強ができる場所を探していることを話し相手に伝え、自分に必要な情報を得ようとする。

在日ベトナム人社会は「口コミ社会」[戸田 2001: 50]と言われており、その背景には親世代の日本語能力の問題があげられる。彼らは新聞を定期購読することはせず、またテレビから情報を得る機会も少ない。彼らにとって、口伝えて情報を得ることは情報を入手する上で有効な手段であると考えられる。さらには、ミサに参加しないベトナム人にとっても、ミサに通う親戚や知人を通して、自分に必要な情報を得ることができる。このように教会という場所は、周辺に居住する在日ベトナム人にとって情報を収集する場であると考えられることができる。

男性達は、雑談するにとどまらず時には庭先でバーベキューを始めたり、教会に必要な家具などを廃材などでこしらえたりする。バーベキューでは、ベトナムではよく食べられる山羊肉を焼くこともある。彼らが今までに作った家具には、スリッパ棚といった小さなものから教会の中庭に設置されている6人掛けベンチとテーブルのセットといった大きなものまで様々なものがある。

ミサの間に乳児をあやしたり、ミサ後バーベキューをしたり日曜大工を行うことは、在日ベトナム人にだけに見られる。ミサ中に日本人や在日韓国・朝鮮人の女性達が乳児をあやすことはない。時折、バーベキューには神父や日本人が参加することもある。これらの活動は在日ベトナム人の「恒例の活動」として容認されている。バーベキューにビールが加わるとさらに賑やかな場となる。

以上のように、教会の日常的な活動であるミサに参加する在日ベトナム人は、日本人や在日韓国・朝鮮人達と同じようにミサに参加しながらも、在日ベトナム人カトリック教徒としての独自の活動を見せるものの、それらも日本のカトリック教会という範疇を越えないものである。それでは、次にB寺の場合はどうなのか見ていくことにする。

2. 在日ベトナム人仏教徒と寺との関わり方

在日ベトナム人の約6割が仏教徒と言われているが、彼らはカトリック教徒が持っているような全国的なネットワークは持っていない。しかしながら、1984年頃から仏教系活動の動きが見られるようになったと言われている。ここでは、先行研究に依拠しながら、仏教系活動の歴史的な経過を述べた後に、2005年に建てられた埼玉県Y市B寺で行われた活動について報告する。

2. 1. 仏教系活動の歴史⁸⁾

ベトナム戦争期の南ベトナムで、仏教徒は民主化運動の主な担い手のひとつであった。南ベトナム仏教界のリーダー達は、仏教徒を組織するために1964年「*Giao Hoi Phat Giao Viet Nam Thong Nhat* (ベトナム統一仏教会)」を形成した。1971年には、この組織に属する僧侶が日本で活動していたことが確認されている⁹⁾。

ベトナム戦争終結時の1975年は、ベトナム統一仏教会に所属する者も含め10数人のベトナム人僧侶が日本に在留していたが、1985年頃には2人に減少した。そのうちの一人が1986年から87年にかけて「*Chi Bo Phat Giao Viet Nam tai Nhat Ban* (在日本ベトナム仏教支部)」を設立した。

この「在日本ベトナム仏教支部」とは別に、難民として来日したベトナム人仏教徒は1986年に「*Cong Dong Phat Tu Viet Nam tai Kanagawa va Vung Phu Can* (在神奈川ベトナム仏教徒協会)」を設立した。この仏教系組織は、当時神奈川県に居住していた人々が中心となって形成された。

1987年には、日本側の諸支援者の協力により、神奈川県藤沢市にある浄土宗善然寺から墓地を得た。この当時、難民として来日したベトナム人仏教徒と関係が深かったのは、立正佼成会であった。神奈川県立正佼成会大船教会では、仏誕・盂蘭盆会などの仏教行事を行うための場所を提供していた。

「在日本ベトナム仏教支部」の代表である僧侶は、寺を建てるための資金を集めるために、1988年8月14日に東京、そして8月21日に神戸で「*Dai Nhac Hoi Tinh Thuong - Vu Lan Thang Hoi* (愛情大音楽会-勝会盂蘭盆会)」を開催した。ところが、この音楽会を経済的に支えているのは大使館側のベトナム人であったため、反現政府の立場を取るものが多い在日ベトナム人社会から強い反発を受け失敗に終わった。その後、「在日本ベトナム仏教支部」は消滅したと思われる。

1991年になり、「在神奈川ベトナム仏教協会」に分裂の兆しが現れた。執行部のメンバーがほぼ全員辞任し、1994年に無宗教の「*Hoi Than Huu Tuong Tro Viet Nam* (かながわベトナム親善協会)」を設立した。残された「在神奈川ベトナム仏教協会」の人々は、組織名を「*Hoi Phat Giao Viet Nam tai Nhat Ban* (在日ベトナム仏教協会)」へ変更した。

自分達の寺を持ちたいと願っていた「在日ベトナム人仏教協会」の人々は、1996年に全日本仏教青年会¹⁰⁾の紹介により、神奈川県横浜市にある真言宗宝積寺から無償で土地の提供を受けた¹¹⁾。在日ベトナム人仏教教会の人々を中心に、この寺の敷地内にプレハブのC寺を建てた。C寺にはベトナム人住職が住み込ん

でいた。C寺の詳細については後述する。

C寺を建立してから2年後の1998年に、「在日ベトナム人仏教協会」は「*Giao Hoi Phat Giao Viet Nam Thong Nhat Hai Ngoai tai Nhat Ban*（在日ベトナム統一佛教教会）」へ名称を変更した。

2.2. C寺の歴史¹²⁾

ここではC寺について概観しておく。寺の内部の中央には、「*Phat Thich Ca*（釈迦牟尼佛像）」がある。その両側には亡くなった僧侶や信者の写真が納められている。

1989年、住職であるベトナム人僧侶がベトナムを難民として脱出し、173人とともに乗ったボートが漂流中に救助され、アメリカへ向かうことになった。その途中、東京に立ち寄った僧侶は、在日ベトナム人の仏教系活動が窮状していることを知り、日本定住を決意した。それ以後、在日ベトナム人仏教徒の中心的存在となり、積極的に組織化を進めていった。この僧侶は「在日ベトナム人仏教協会」の組織化に大きく貢献した人物であった¹³⁾。1992年から96年まで様々なキャンペーンで寄付を集め、ついに1996年に寺を建てるに至った。将来的には、広い寺を建設し、他の仏像を配置する予定であると語った。

C寺の運営は、仏教徒の寄付によっている。ベトナム語による仏教雑誌も発行されており、仏典解説の他に、祖国ベトナムや日本国内のニュース、催し物のお知らせ、寄付者のリストが掲載されている。

仏教行事は陰暦によって行われている。C寺では、陰暦にもとづく行事を年3回行っている。「*Le Thuong Nguyen*（上元節、1月15日）」、「*Le Phat Dan*（仏陀生誕日、4月15日）」、「*Le Vu Lan*（中元説、日本では盂蘭盆会と呼ばれる。7月15日）」である。実際には多くの人々が参加できるように、その日に近い日曜日に執り行われている。それぞれの行事は、ベトナム人住職をはじめ近郊に住む在日ベトナム人僧侶によって進められるが、その準備は「仏教徒家族」の会員によって行われる。「仏教徒家族」は寺と住職を支える組織であるが、現在の会員は30人ほどで、C寺の宗教行事や夏のキャンプなど寺に集まる人々の親睦を深める行事などを準備、実施している。

儀礼を行う時、住職は黄色の袈裟を着用し、儀礼に参加する人々は灰色の衣を着る。儀礼の間に、立った姿勢から床の上に膝を折り、床に額をつける拝礼が多く行われる。

儀礼中はすべてベトナム語の経典あるいは経典の一部が抜粋された抜粋の冊子

が用いられた。住職の説教もベトナム語で行われる。また、「*A Di Da Phat* (阿弥陀仏)」が挨拶言葉として使われている。2000年代に入って住職が病気治療のため渡米したため、寺の活動が休止状態に陥ったと思われる。

2.3. B寺について

ここでは、2005年に在日ベトナム人によって建てられたB寺についての報告を行う。この寺の建設には、C寺の元住職の語りを通じてC寺に集まる人々が強く関わっている寺だと推測されるが、現時点では、そのことを立証する十分なデータはまだ得られていない。

B寺は、2005年に埼玉県Y市に建てられた。あまり交通の便が良くない場所であるため、寺に集まる多くの人々は自家用車でやって来る。

B寺は、本堂と2階建ての居住スペースからなる。本堂には色鮮やかな仏像が設置されている。本堂の横にプレハブ小屋があり、そこには故人の写真と位牌が納められている。居住スペースの2階にある一部屋は、住職の部屋になっており、そこで寝泊まりしている。週末になると、住職だけでなく遠方からやって来る人々が泊まることもある。庭には菩薩像と子供用の遊具が設置されている。

住職である尼僧は、ベトナム南東部に位置するカインホア省ニャチャンにある寺も管理している。ベトナムでの務めもあるため10月になると帰国する。再び来日するのは、1月の上元節の時である。B寺に滞在している間は、毎朝6時から本堂で読経を1時間行う。また、夜10時頃になるとインターネット通信を用いて、日本以外に居住している仏教教徒に対して説法を行う。

B寺で行われる仏教行事は、毎週日曜日の説法と上元節、仏陀生誕日、中元説である。行事に参加するために寺へと集まる人々は、家族連れあるいは知人を伴ってグループでやって来る。ボートピープルだった者の多くは、東京にある品川救援センターか、あるいは神奈川県の大和定住促進センターを経て、関東地域に定住した者ではないかと推測される。中には姫路定住促進センターを出て、関西地域で何年か暮らしてから関東へ移動してきた者もいた。そのほか、寺に集まる構成員として、茨城県の工場に勤める研修生のグループの姿も見られた。

寺に集まる人々の居住地域は、東京都、埼玉県、茨城県などに分布しており、遠方に住む信者は自家用車に乗ってやってくる。日曜日の説法には、70名～80名程度の人々が寺に集まるが、その中で寺の運営を任されている人々が10数名ほどおり、彼らの職業は、レストラン経営者、廃品回収工場経営者、福祉施設経営者などである。彼らは、日本語ができない住職に代わり、行事の際に必要な近隣住

民との交渉などを行っている。

2. 4. 孟蘭盆会（2008年8月10日）

B寺最大の行事のひとつである孟蘭盆会（*Le Vu Lan*）が、2008年8月10日におこなわれた。この日は250人程度の人々が集まった。

午前9時頃から人々は集まりだし、儀礼の準備をする若者達、居住スペースや庭で雑談をする人々の姿が見られた。女性達は台所で儀礼の後に振る舞う精進料理の準備をしていた。この日の献立は、肉に見立てた具を入れた麺と蓮の実を使ったデザートだった。麺のスープは東京のベトナムレストランに勤めているベトナム人シェフに事前に用意させたものだった。子ども達は庭の遊具や居住スペースで遊んでいる。大人達は皆ベトナム語で話していたが、子ども達は日本語だった。

午前11時頃になると本堂に人々が集まり始めた。本堂に集まった人々の中には薄い水色の衣を身に付けているものがいた。儀礼の開始直後、黄色の袈裟をまとった住職が説教を行った。次に親への感謝の気持ちをあらわす儀礼が行われた。参加者には布で作られた花のバッチが配られた。花と葉の色によって、「両親とも健在」、「両親のどちらかが健在」、「両親とも死亡」に区別される。そして、両親とも健在のグループ内の年長者が「幸せ者」として、両親とも死亡のグループ内の年少者が「不幸せ者」として皆に紹介された。儀礼に最中には、キーボードとエレキギターの伴奏に伴い女性が何曲か歌った。女性の歌が終わると、事前に手元に配布されていた経典を抜粋した冊子を皆で読み上げた。この年には、アメリカに行った元C寺の住職が招聘されていた。元住職は儀礼の終盤に、男性2人の後ろにつく形で元住職が入場してきた。入場後は住職に代わり元住職が読経を行った。

本堂に入らず庭にいた人々は、建物に設置されたスピーカーを通して儀礼の様子を聞いていた。儀礼中、外で煙草を吸いながら雑談をする男性達や菩薩像に祈りを捧げる人の姿が見られた。儀礼が終わると、女性達によって用意された精進料理が振る舞われた。儀礼に参加した人々のほとんどは、食後は庭先や居住スペースの1階で仲間と雑談を交わした後、寺を後にした。夕方にはほぼ全員が帰った。

夕方以降の寺には、中心人物を思われる人々とその家族数十名が残った。彼らは夜まで残り、雑談の合間に昼食の残りで夕食を済ませ、男性達は酒を飲み始めた。男性達が酒を飲みながら歓談している間、若い女性達は子ども達の世界や食器の後片付けなどで忙しそうにしていた。年配の女性達は男性達の輪に入って語らう者もいたが、男性達が酒を飲み始めると、その輪から外れて女性達だけで集っ

て果物を食べながら雑談をはじめた。

雑談に加わっていた50代の女性に、寺に通う理由を尋ねてみると、次のように語ってくれた。「もちろん、神様を思う気持ちがあり、神様へありがとうと言いたいから。そして昔の人（先祖）を大切に思う気持ちがあるから。でも、ここは家から遠い。それでも来るのは、ベトナム語が話せるから」と語ってくれた。さらに、「普段は日本語ばかり話しているから、ここでベトナム語を話すと嬉しい」と続けた。

工場で働いている40代の男性は、日本人女性と結婚して小学生の娘がいる。妻と娘はベトナム語が話せないため、家庭内の会話はすべて日本語である。彼は少しでも日本語が上達するようにと、今でも仕事の合間を縫っての漢字ドリルでの書き取り練習は欠かさないという。男性はいつもひとりで寺に来るという。寺に来る理由として、先ほどの女性と同じく「普段は日本人ばかりのところで生活している。ここに来るといろいろな人とベトナム語に話せるから楽しい」と語った。

夫ともに寺に通う40代の女性は、寺にいる間は夫と一緒におらず、同世代の女性や別の男性と話していることが多かった。この男性は、元留学生で政変によりベトナムへの帰国を断念した。彼は老人施設を経営していたこともあり、就職先の斡旋などを行っていたようだ。B寺の建立にも貢献した人物のようで、ほかのベトナム人からも兄のように慕われている。女性はその男性を「兄さん」と呼び、娘の進学のことや就職のことなど相談しているという。さらに、女性はここに来るといろいろな人に相談ができるから助かると語った。

彼らが寺に集まる理由として、「日々の生活に有効な情報交換ができること」と「ベトナム語が話せること」の二点が挙げられる。彼らにとって有効情報とは、近所のベトナム人に関する情報や、子どもに通わせる学習教室の情報や求人情報など多岐に渡っている。彼らは普段はあまり話せないベトナム語で情報を共有し、そこで得た情報を個々の日常生活へ還元させていくのである。

寺を後にして帰宅する頃になると、酒を飲んでいた男性達は儀礼の時に身に付けていた水色の衣を再び身に付け、二階の部屋で休んでいた住職と元住職のもとへ行き挨拶を交わしていた。彼らは寺を出る前に、供物の果物をそれぞれ分配し、10時頃になってようやく皆が寺を後にした。この日は、研修生の20代の男性と50代の女性が宿泊した。この女性は翌日の朝食の準備を行った。寺で用意される食事は精進料理のため、作ることができる者は限られている。この女性はしばしば寺を訪問し、住職の食事の用意をしている。

盂蘭盆会では日本人仏教徒の参加は見られず、日曜日の説法においても同様の

ことが言える。寺には日本語しかわからない子どもも来ているが、そこで行われる行事はすべてベトナム語で行われる。施設として既存の日本の寺を用いるのではなく、一目で「ベトナムらしい」とわかるような建物を建て、そこに「ベトナムらしい」仏像を置いている。この点においては、在日ベトナム人カトリック教徒と大きく異なる点である。次章では、この差異が意味するものが何かについて考察していく。

3. 在日ベトナム人カトリック教徒と仏教徒に見られる差異の検討

在日ベトナム人カトリック教徒は、来日後間もなく日本の教会に所属した上で独自の活動を展開していった。その一方で、在日ベトナム人仏教徒は、来日直後は異なる宗教や同じ仏教でありながらも習慣が大きく異なる日本の仏教団体を通して、宗教活動を展開していった。やがて、習慣が異なる日本の仏教に「抵抗感」を抱くようになり、自分たちの寺を建てることを目指した。この時に抱いた「抵抗感」が自分達の持つ寺を持つきっかけとなったのではないだろうか。

おそらく、仏教徒に関する活動内容がつかめず空白と見なされている期間は、自分たちの寺を設立するための準備をしていたのではないと思われる。

在日ベトナム人が定住生活を始めるにあたり、外国人という理由から住まいや仕事の確保など様々な場面において困難に遭遇したことは周知の通りである。加えて、在日ベトナム人仏教徒においては、信仰生活の確保という問題にも直面せねばならなかった。この問題が決して安易でなかったことは、在日ベトナム人仏教徒の組織が複雑な変遷の歴史をたどってきたことや、定住開始から30年経過した頃ようやく寺が建てられたことから想像ができる。

今後、空白と見なされている期間を明らかにするための調査を行い、在日ベトナム人仏教徒の活動の変遷の全容を明らかにすることは、今まで語られてきた在日ベトナム人の定住化のプロセスとは異なる側面を発見することができるのではないだろうか。なぜなら、在日ベトナム人カトリック教徒は、在日ベトナム人の全体数から見ると少ないとは言え、組織基盤が安定していることから彼らの動きは可視化されやすかったからである。つまり、在日ベトナム人研究に関する多くの記述はカトリック教徒を取り上げたものがほとんどであった。このような指摘は近年のベトナム人研究者において頻繁に議論されているものの、なかなかその突破口を見つけ出せずにいた。

今回、今まで明らかにされてこなかった在日ベトナム人仏教徒に関する活動を

取り上げ、在日ベトナム人カトリック教徒との差異を提示したことにより、在日ベトナム人の定住化のプロセスが多様性を持つものであるのではないかということを示唆できるのではないだろうか。

おわりに

本稿では、カトリック A 教会と B 寺に集まる在日ベトナム人の活動を比較検討した。その結果、定住生活を営む上で信仰生活の確保という点において差異が見られることがわかった。在日ベトナム人カトリック教徒は比較的容易に信仰生活の確保ができたが、在日ベトナム人仏教徒は困難であったことが予想される。在日ベトナム人仏教徒に関しては、活動が表面化しなかったことから今まであまり語られてこなかったが、B 寺の出現をきっかけに空白部分を埋めていくことにより、今まで在日ベトナム人カトリック教徒を中心として記述されてきた在日ベトナム人の定住化のプロセスにおいて新たな側面を加えることができると考えられる。

加えて、両者の差異に注目して在日ベトナム人の定住化のプロセスを検討することは、「エスニック・アイデンティティ」や「文化保持」について考える上で新たな視点を提示することへ繋がる。先行研究では異なる宗教を信仰する在日ベトナム人の「エスニック・アイデンティティ」や「文化保持」について同じ枠組みの中で論じてきたが、宗教的な差異に注目することにより在日ベトナム人の「エスニック・アイデンティティ」や「文化保持」の多様性に関する議論に寄与することが期待される。このことから、在日ベトナム人社会を宗教的差異という側面が捉えなおすことは、重要な視点であると言える。

以上の点を踏まえ、今後の課題として、B 寺の設立までの経緯だけでなく、どのような人々が中心となって活動を運営しているのか、どのくらいの活動資金が動いているのかについて踏み込んだ調査を行い、B 寺の設立に至るまでの経緯を明らかにしていきたい。さらには、在日ベトナム人仏教徒がたどった定住化のプロセスについての詳細についても明らかにしていきたい。

日本社会においてエスニック・マイノリティである在日ベトナム人の定住化のプロセスを宗教的側面の差異を通じて明らかにすることは、今後ますます進むであろうと予測される日本社会の多文化化にともない、様々なエスニック・マイノリティが持つ宗教と社会の関係性を検討するうえで有効な可能性を持っているだろう。

【注】

- 1) ここでの「不安定性」とは、ベトナム語よりも日本語で意思疎通をする世代が、ベトナム人神父やベトナム人住職の話すベトナム語が理解不能で、集団の中で「ベトナム人性」を感じつつも、「日本人」と「ベトナム人」の間でアイデンティティが揺れることを示している〔川上 2001a : 246〕。
- 2) 仏教徒は約 6 割存在すると言われている〔財団法人アジア福祉教育財団難民事業本部 1993 : 17〕。
- 3) カトリック系活動の歴史的記述については、〔戸田 2001 : 117-121〕を参照した。
- 4) 幼稚園舎だけでなく聖堂も焼失した。教会内の建物は2006年5月に再建された。
- 5) 難民事業本部が1979年に開設した。ここでは、日本語教育のほか日本の生活習慣や法律などの社会適応指導が行われた。
- 6) 日曜日に開かれる小学生を対象にした教会学校。主に聖書に関する教育を行うが、クリスマス会のような歌や遊びを中心とした会も開催する。
- 7) カトリック大阪教区本部事務局『大阪カトリック時報』510号（1995年10月）を参照した。複写資料のため頁数不明。
- 8) 仏教系活動の歴史的記述については、川上〔2001b : 45-70〕と戸田〔2001 : 112-130〕およびC寺の元住職の語りから得られたデータに基づいている（2008年8月12日）。
- 9) 日本での「ベトナム統一仏教会」の存在を示す一例として、1971年に立正佼成会で行われたベトナム平和祈願の行事に参加していた〔戸田 2001 : 122〕。
- 10) 日本全国の宗派・地域の垣根を越えて、仏教徒相互の友好と連携を目的として団体。
URL: <http://www.jyba.jp/senniti.htm>
- 11) ラオス・カンボジアの仏教徒と共に、「インドシナ難民の寺」として提供を受けた〔財団法人アジア福祉教育事業団難民事業本部 1998 : 85〕。
- 12) C寺の記述については、〔川上 2001 : 56-59〕を参照した。
- 13) 現在はアメリカ・カリフォルニア州にあるベトナム寺院の僧侶として活動している。

文献

- ・カトリック大阪教区本部事務局：1995『大阪カトリック時報』510号（複写資料）。
- ・叶堂隆三（編著）：1996『神戸のアジア系外国人—宗教組織と震災の対応に関する調査』。
- ・川上郁雄：2001a『越境する家族』、明石書店。
- ・———2001b「在日ベトナム住民の宗教実践とエスニック・アイデンティティ」『アジア移民のエスニシティと宗教』吉原和男、クネヒト・ペトロ（編）、pp. 45-70、風響社。
- ・財団法人アジア福祉教育財団難民事業本部：1993『インドシナ難民の定住状況報告調査』。
- ・同：1998『大和定住促進センター18年誌』。
- ・財団法人入管協会：2007『平成十八年度在留外国人統計』法務省入国管理局編集。
- ・戸田佳子：2001『在日ベトナム人コミュニティ 一世の時代、そして今』暁印書館。
- ・ミン・チー：1995「ヴェトナム仏教の複雑な素顔」『アジア読本・ヴェトナム』坪井善明

56 在日ベトナム人宗教施設が持つ社会的意味に関する一考察

(編) pp. 218-223、河出書房新社。

(のがみ えみ、国際文化学研究科文化人類学コース)